当財団の「アド・ミュージアム東京」資料室には、さまざまな企業PR誌が所蔵されています。
その中から優れたものを取り上げ、それがどのような企業個性を表し、時代を捉えているかを探ります。

朝日放送「放送朝日」1965年

放送と文化について真摯に向き合う

「放送朝日」は1965（昭和40）年4月号の最終ページ「LOBBY」欄で、図書新聞の記事を引用し、自らをこう語っています。

「この『PR誌』のスマートさは『CBCレポート』とも違う。『CBCレポート』の方は、まだ安定したパタンの上の仕事を中心にしているのに対し『放送朝日』の方は、放送マスコミの問題を、固定化した思考パタンから出発して眺めることに対して、嘲笑しているかのごとくである。一昨年来、この『PR誌』の特色ある中核になっているのは『情報産業』という問題の提出の仕方である。たいへんマクロな問題提起で、その点タイムスパンは極度に長期的である。また、この『PR誌』はしばしば日本文化の問題として放送をとりあげる。その場合でも、文化のとらえ方は固定化したアプローチからまったく自由である。そうした自由さ、『あそび』といってもいいだろうが、それが『放送朝日』の特色を生み出しているようにみえる」

この記事にあるように志の高い編集姿勢を持つPR誌です。

「放送朝日」は1965年1月号で128号を数え、この時点で10年を超す歴史を積み重ねています。

1965年は、東京オリンピックの翌年で、ジャルパックが発売され海外旅行熱が高まった年です。エレキギターブームが起こり、大学生にマンガが大人気になり、アイビースタイルが流行しました。戦後20年、期待される人間像、ベ平連、ワタシニモウツセマスなどが流行語になりました。

「放送朝日」1965年1月号は、表紙で「特集＝経済と文化の対応」をフィーチャーしています。

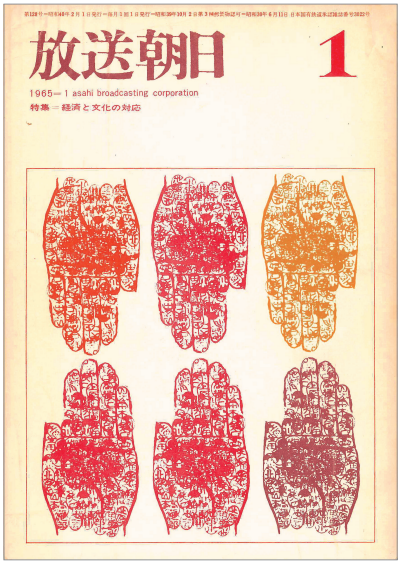
「特集＝『情報産業論』の展開のために Ⅲ 経済と文化の対応」は、梅棹忠夫（大阪市立大学助教授）、鎌倉昇（京都大学助教授）の対談です。アマチュアリズムとプロフェッショナリズム、国家と企業、媒体と広告、経済人と文化人など次々に語りながら情報産業と商業主義について論を展開しています。

気骨ある多彩な小企画

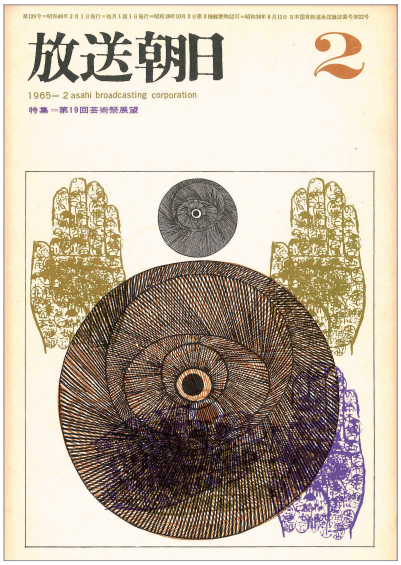
「三つの椅子」は、河野一郎（国務大臣）、荒垣秀雄（朝日新聞論説顧問）、原清（朝日放送専務取締役）による新春放談「言いたいことイイ・したいことシイ」と題する鼎談です。〈記者生活回顧録〉〈これからのニッポン〉〈マスコミへの提言〉という見出しが示すような幅広い話題で興味深い内容です。

「電波料再論」は、この雑誌が前年の9、10月号に掲載した「電波料の理論」（民放研）の批判論文―川畑精史―に応える神尾沖蔵（横浜国立大学経済学部教授）の論文です。民放事業をどのように認識・規定するか、そこから電波料について定性的考慮を行おうとしています。真摯な、本質に関わる考察です。このようなバトル（論争）が行われること自体にこの雑誌の性格が表れているようです。

「コミュニケーション美学1『ヨーロッパ旅行』」森啓（グラフィック・デザイナー）は写真をたくさん挿入しながら新しい世界に触れた驚きを語ります。目をいっぱいに見開いて素直に感じたままを記しています。海外旅行はまだ一般人には珍しい時代のレポートです。



1965年1月号表紙



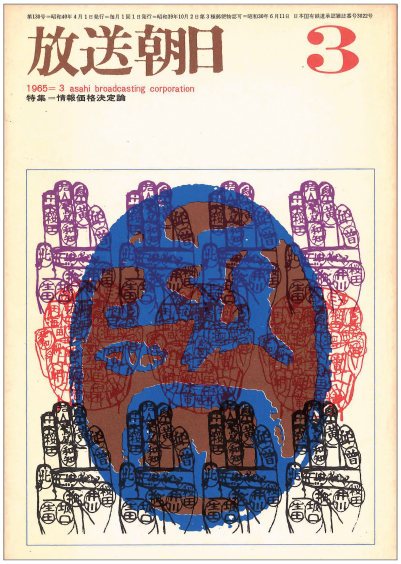
1965年2月号表紙

「エリアを行く＝紀伊半島5『烏鷺の国境』」は小松左京（作家）の文明批評に満ちたドライブ紀行です。

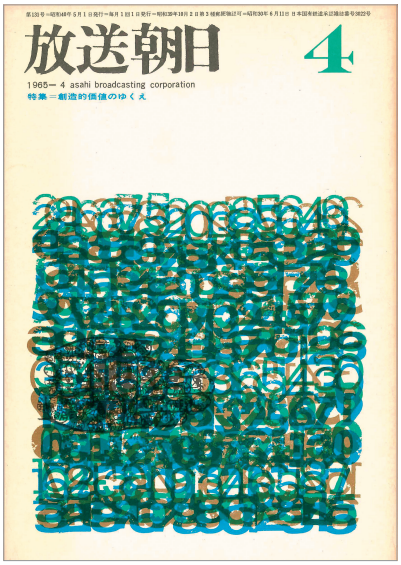
「古典と現代『肉附きの面』」は、花田清輝の文、粟津潔の絵による高踏派の一ひねりした内容です。

「知られざる情報産業『CATVに悩む米放送界』」藤原恒太（東京12チャ

おかだ よしろう● 1934年東京都生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。56年電通入社。コーポレートアイデンティティ室長を経て電通総研常任監査役。98年退職。70年の大阪万博では、「笑いのパビリオン」を企画。80年代は電通のCIビジネスで指導的役割を果たす。著書に『社会と語る企業』(電通)、『観劇のバイブル』(太陽企画出版)、詩集『散歩』(思潮社)、『世界一の映画館と日本一のフランス料理店を山形県酒田につくった男はなぜ忘れ去られたのか』(講談社)など。



1965年3月号表紙



1965年4月号表紙

ンネル教育局)は、アメリカのCATVが急速に広がり既存のテレビ局の経営を脅かすほどに成長している状況を説明しています。

「視聴覚情報」は、〈音楽と再生音楽〉〈ミノー前FCC委員長ポスト誌へ〉〈マスコミ的世界平和像〉という見出しでメディアに関わる話題を提供しています。

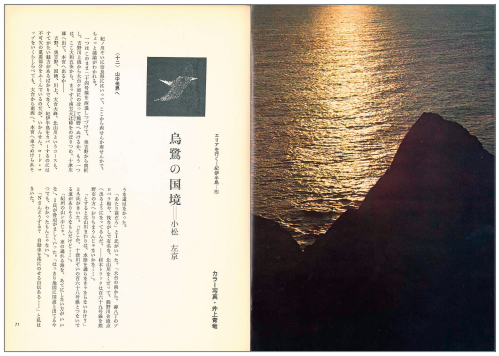
「海外の放送局8　NBC=WRCA[ニューヨーク]」は、最新の情報を実地に取材して臨場感豊かにレポートしています。

「世界の放送事情」は、〈TVガイド〉〈タイム誌〉〈IPA〉などの記事により、視聴率調査、テレビ局、広告主の動向などを簡潔に伝えています。

「タレント交遊録5・お笑いプロデューサーの思い出」松本昇三(元朝日放送演出部長)は、森光子との知られざるエピソードを披露している楽しいページです。

吉田茂による「私の歩いた道」は、戦後政治の秘話を語っています。

「大阪動物誌12・犬猫の墓」は、鬼内仙次の文、米良道伯の絵で、動物の埋葬について自分の体験をもとに随筆風に記述しています。



1965年1月号の小松左京によるドライブ紀行、「エリアを行く=紀伊半島5『烏鷺の国境』」

1965年1月号の現地レポート、「海外の放送局8　NBC=WRCA[ニューヨーク]」

「マス・コミ風俗誌・ああ、リアリズム!」中林一夫(風俗評論家)は、写真家・土門拳のリアリズムについて諧謔を込めて批評しています。

事業を支える電波料について2号連続で考察

2月号は「第19回芸術祭展望」特集です。

「ラジオ部門」は、安東英男(音楽舞踊演出家)、杉山誠(俳優座養成所主事)、村野四郎(詩人)による座談会で、「ラジオドラマ本年度の傾向」を語っています。「テレビ部門・ドラマ」は、飯島正(映画評論家)の講評、「テレビ部門・ドキュメンタリー」は、菅原卓(演出家)の講評と朝日放送の現場担当者・評論家による座談会です。「音楽部門」は、山根銀二(音楽評論家)が講評とともに問題提起を行っています。

特集以外はほぼ前の号と同じ構成の目次ですが、宝田進(放送評論家)の「『電波料』論争に期待するもの—神尾論文を読んで—」は、この冊子で2回にわたって交わされている論争についての意見です。このように問題を掘り下げて論議する真面目さと熱さが「放送朝日」の個性なのでしょう。

3月号は「特集=『情報産業論』の展開のためにⅣ 情報価格決定論」、4月号は「特集=『情報産業論』の展開のためにⅤ 創造的価値のゆくえ」を掲載しています。読み応え十分の骨のある特集です。